

書評

江川 寛(編) 「医療科学」

高久 史麿

(国立国際医療センター総長)

今回医学書院から東邦大学病院管理学・江川寛教授の編集による「医療科学」という本が出版された。“医療科学”という言葉は私たちにとって目新しいものであるが、医学の社会的実践である医療を体系的に捉え、組み立てていくことは医療の内容の広がりを考えると当然必要なわけで、そのような体系を“医療科学”と名付けることに私自身大いに賛成である。

編者の江川教授が所属されておられるのは病院管理学の分野であるが、本書の中に取り上げられている問題は、医療概論、社会と医療、医療関係法規、医療制度と行政、社会保障と医療経済、医療資源、医療供給体制、医療における医師患者関係、医療情報、医療管理、医療における意志決定、医療評価、と極めて多岐にわたっており、この本の標題である「医療科学」の全分野をカバーしたものになっている。従来、このような分野は公衆衛生関係の本の中で解説されることが多かったが、本書は、従来の公衆衛生学の本の内容よりもはるかに幅の広いものになっており、今までとは違った視点から医療に関する様々な問題を取り上げた新しい形の本といえるであろう。

医学の専門分化が進むにつれて、医師は自らの専門の領域の診療、教育、研究にますます多くの時間がさ

かれるようになった。その結果、医学・医療に関する基礎的な知識、技術の研修に費やされる時間の割合が少なくなり、医学校における医学・医療の基本的な問題についての教育も不十分となる傾向が憂慮されるようになった。そのような傾向に対応するため、昭和64年の医師国家試験出題基準の改訂以来、厚生省は毎年行っている医師国家試験の中に医学・医療総論の項を設け、医学・医療に関する基本的な問題を積極的に取り入れるようになってきている。本書は医学生がその中の医療に関する問題を勉強するのに最適な参考書といえるであろう。

しかし、本書の読者対象は、医学生ばかりでなく、研修医をはじめ、医療の前線で患者の診療にあたっている医師すべてであると考えられる。というのは、周知のごとく医療をとりまく社会環境の変化は著しく、本書で取り上げている医療経済、医療資源、医療行政、医師患者関係などについて、現在医療の前線にある医師が医学生の時代に得た知識、あるいはその後の経験から修得した知識と、現在の状況とが著しく異なっている可能性が十分に考えられるからである。

医療はいうまでもなく社会と密接に関連して発展すべきものである。本書はその問題について広く取り組んだ極めてユニークな本であり、多くの医学生、医師が一読されることを強くおすすめしたい。

(B5 頁302 図92 表70 1995 定価4,944円(税込) 400)